

出張授業「ふれあい天文学」

みなさんこんにちは。卒業式も終わり、3学期も残すところわずかとなりましたね。ヤンゴン日本人学校は前号で紹介した通り、教員の離職の関係もあり 3 月 15 日に修了式・離任式が終わり、16 日から春休みに突入しています。昨日は 3 年目教員も離職し、私たちの代が最年長となってしまいました。新年度からは学校長も変わり、あらたなヤンゴン日本人学校がスタートします。この学校に通う子どもたちのために、最後の1年も頑張りたいと思います。

さて…少し前(2月)の話になります。日本の東京都三鷹市にある国立天文台では全国の学校を対象として『出張授業「ふれあい天文学」』という講座を実施しています(<http://prc.nao.ac.jp/delivery/>)。同市の小学校で勤務経験のある同僚がこの講座に申し込んだところ…なんとうちの学校での開催が決定しました！ちなみに海外での開催は初めてということです。うちの学校からは小5~中3の児童生徒が、そしてうちの学校の向かいにある聾学校からは小5・6年生の児童が参加しての開催となりました。



今回講演いただいたのは国立天文台前副台長の小林秀行教授。2時間の講演だったのですが「Mitaka」(<http://4d2u.nao.ac.jp/html/program/mitaka/>)というソフトウェアを使っの疑似宇宙空間体験、宇宙を研究することの意義、そして質疑応答と盛りだくさんの内容で、時間があっという間に過ぎてしまいました。授業後の子どもたちの反応もとても大きく、次の授業で感想を書いてもらったのですが、興奮は治まっていなかったようでした。特に、先述した Mitaka はとても子どもたちの印象に残ったようで、次年度以降私の授業でも使ってみようと思いました。



講演後、小林先生を囲んで夕食会をすることができました。色々興味深い話を聞くことができました。その中で最も興味深かった話が『これからの日本の学者は「もっと相手に自分の意図を伝えるようにする力」を身につけなければならない』という話です。

「天文学」という学問は、望遠鏡等で観測しながら仮説実証したり、発見していく学問だそうです。しかし、超高性能な望遠鏡(例えばハワイの「すばる望遠鏡」)などは台数が限られているため、学者同士で「自分はこういう研究をしている！この望遠鏡で実験・観測すればこういう発見ができる！」というプレゼンテーションを行い、その順位がよい人から、自分が希望する日に望遠鏡を使って観測ができるシステムになっているそうです。そういう機会で、日本の学者は自分の研究や意義について説明した時、相手が分からなかった場合に何度も何度も説明するということが少ないのだそうです。逆に、欧米の学者は何度も相手がわかるまで話を繰り返すのだそうです。そのため、理論などがとてもしっかりしている日本の学者の希望が後回しにされ、欧米の学者の希望の方が先になることがあるそうです。



小林先生曰く『日本って何となく「話が分からない＝聞いている方が悪い」というイメージが強いけど、欧米は「話が分からない＝伝えている方が説明が下手」っていうイメージなのかもしれないですね。』とのこと。確かに私も海外で生活してみて思い当たる節があります。ミャンマー人でも話が私に伝わらなかったら、スマホの翻訳ソフトを使ったり、身振り手振りで一生懸命に伝えようとしてくれることがしばしばあります。そういう『伝えよう』という姿勢こそが、これからのグローバルになっていく社会でとても大切になっていくスキルなのですね。そういう意味でも大変勉強になった一日でした。



聾学校の児童たちも
興味津々でした！

それではまた来月、こちらでの生活をお届けします。